

新潟県中越地震における災害廃棄物の状況に関する調査

大野博之(長崎大学工学部)

宮原哲也(日本環境衛生センター)

八村智明(日本環境衛生センター)

1. 長岡市及び小千谷市の災害廃棄物一時集積場の状況とその後の変化

災害直後に発生した生活ごみなどの災害廃棄物は、それぞれの市で独自に仮置き場に集積され、廃棄物処理施設の復旧を待って、順次、処理処分された。

<長岡市・西部丘陵地の災害廃棄物の仮置き場>

全ての災害廃棄物は処理処分され、その後、仮置き場の表土を厚さ 3cm 程度取り、消毒をした後に覆土を施した。下図の左が平成 16 年 11 月 25 日の廃棄物の仮置き状況、右は平成 17 年 5 月 20 日の状況である。



災害廃棄物の搬入量は、地震発生(平成 16 年 10 月 23 日)から 10 月末日までの期間が、可燃ごみで通常の 1.3 倍の 1963 トン、不燃・粗大ごみが通常の 5.4 倍の 1673 トンであった。通常量に対するピークはこの 10 月の段階までで、発生量としては、可燃ごみでは 11 月以降、通常の量に戻ったが、不燃・粗大ごみは 11 月の段階ではまだ通常の 3.2 倍の 4174 トンの搬入量であったが、12 月以降はほぼ通常の量に戻った。

なお、西部丘陵地内の一時保管量は 11 月 3058 トン、12 月 3146 トン、1 月 2265 トンであったが、2 月は 294 トンに減り、3 月には 0 トンと、仮置き場内の廃棄物は全て処理処分された。

＜小千谷市・山本山市民の家前広場の災害廃棄物の仮置き場＞

ほとんどの災害廃棄物は、発生から半年経過した 5 月の時点で処理・処分された。下図の左が平成 16 年 11 月 24 日の状況、右は平成 17 年 5 月 19 日の状況である。



小千谷市では、12 月 21 日までに仮置き場内の廃棄物は若干の残物があるものの処理・処分された。

山本山市民の家前広場は、5 月 19 日段階で、下図左に示すような可燃ごみ・廃プラスチックなどが若干残されていたが、周辺に見られるたまり水の水質はほぼ正常な値(DO : 5.40mg/l、ORP : 118mV、EC : 277 μ S/cm、pH : 7.21)を示していた。また、脇に瓦礫が仮置きされていた(下図右)。



2. 長岡市及び小千谷市の解体廃棄物集積場の状況

＜長岡市・解体廃棄物一時集積場＞



＜小千谷市・解体廃棄物一時集積場＞



3. 旧山古志村内の家屋等の状況

<蓬平地区>



＜大内から梶金集落に至る区間＞



＜旧山古志村梶金集落の状況＞

